

特 論

第1節 中世寺院遺跡の基礎概念

時 枝 務

はじめに

今回、山梨県内の中世寺院遺跡の分布調査を進めるうえで、われわれがもっとも困ったのは、「中世寺院遺跡とはどのような遺跡なのか」という問いに十分に答えられないままに調査を開始しなければならなかったことである。この問題は、調査を終えた現在でも解決されていないのであるが、調査を進める過程で徐々に認識が深化したことも確かである。そこで、ここでは、考古学の視点から中世寺院遺跡を把握する際の基礎概念について若干の整理をおこない、今後の調査・研究の際の参考に供したいと思う。

1 寺院と仏堂

中世寺院を考えるうえで、最初に、明確にしておかねばならないのは、そもそも寺院とはどのようなものなのかということである。

寺院を『広辞苑』で引くと「寺」とあり、寺をみると「仏像を安置し、僧・尼が居住し、道を修し教法を説く殿舎。中国で『寺』はもと外国の使臣を遇する所の意。伽藍。蘭若。梵刹」と説明されていることから、仏・法・僧の3要素が揃った宗教施設であることがわかる。寺院は単に仏像が安置されているだけの場所ではなく、僧尼が居住し、仏法を説く施設であることが確認できる。『岩波仏教辞典』では、「寺院の建造物は、礼拝の対象を祀る〈堂塔〉と、僧衆が居住する〈僧房〉とに区分される」とし、それぞれが起源を異にするものであることがつづさに解説されている。寺院は仏像などを祀る空間と僧侶が居住する空間が合体して成立したものであるというわけである。

ついで、考古学では寺院をどのように捉えているのかを知るために『図解考古学辞典』をみると、「寺院址」の項目でインド・中国・朝鮮・日本の寺院遺跡について概観した後に、日本における発掘調査の成果を踏まえて「これらの伽藍には塔、金堂、中門、回廊、講堂、食堂とその付属建物、僧房、鐘楼、経蔵、南大門等の諸門、その他の雑舎がみられる。通常地下に礎石、地覆石、基壇、建物の周溝、参道などがのこるのみであるが、礎石は往々とりさられ、わずかにその根石や掘立柱の跡が建物の旧規をしめすことがある」と記されている。これは古代寺院を念頭に置いたもので、そのまま中世寺院に適用することは避けねばならないが、寺院遺跡は堂塔と僧房をはじめとする多数の建物からなると考えられていることがわかる。

このような寺院の概念を敷衍すれば、中世寺院は、中世に機能した堂塔と僧房を併せもつ施設であり、その遺跡は基本的に複数の建物群によって構成されるということになる。

ところが、今回調査された遺跡のなかには、単独の仏堂のみで構成され、それ以外に建物をもたないとみられる例が散見される。中世寺院が堂塔と僧房の複数の建物によって構成されるものであるとすれば、そのような遺跡をどのように取り扱ったらよいのかが問題となる。

古代の場合、集落内から発見される単独の仏堂を「村落内寺院」と呼んでいるが、寺院と呼ぶことは正確な表現とはいえない。仏堂はあくまで礼拝施設であって、神を祀る小祠と同様な存在である。仏堂に僧房が伴って初めて寺院と呼ぶことができるのであり、仏堂のみの場合は、寺院と呼ぶべきではない。仏堂は寺院を構成する重要な要素ではあるが、単独で存在する場合には、寺院と明確に区別しなければならない。

最近、中世寺院遺跡についての包括的な論文を著した笹生衛は、「中世の仏教や寺院・堂の歴史を、考古資料を使って考える場合、大規模な伽藍・僧坊を持つ寺院のみでなく、一堂形式の小規模な仏堂も分析対象に含めなければ、中世仏教の実態解明にはつながらない」と的確に指摘している¹⁾。中世寺院と単独の仏堂は、形態差や僧尼の存否に留まらず、宗教的な性格や担い手を異にしていた可能性が高い。両者ともに仏教的な施設であるからといって混同することは、遺跡の正確な理解を妨げるのみでなく、歪んだ歴史叙述を生み出す根源となる危険

を孕んでいる。

たとえば、今回調査した甲府市右左口円楽寺旧境内と富士河口湖町富士山二合目富士御室浅間神社境内の2箇所の行者堂は、いずれも役行者を祀った仏堂であるが、その性格はかならずしも同一であるとはいえない。円楽寺の行者堂は、奥の院とよばれる一面に六角堂・「馬の権現」堂・五社神社と隣接して営まれており、やや離れた地区には「坊寺」32箇寺が営まれていた。「坊寺」は院坊であり、寺院の運営に携わる修験者が居住する僧坊としての性格をもっており、それらが一体となって円楽寺という寺院を構成していた。行者堂は、円楽寺一山の象徴的存在として、いわば本堂的な機能を果たす仏堂として位置づけられていた。それに対して、富士山二合目の行者堂は、聖地に設けられた独立した仏堂であった可能性が高いと考えられる。行者堂は小室浅間神社に隣接して営まれているが、すぐ下の平場にあった定善院によって管理されていた仏堂であるようにみえるが、定善院は時宗であったというから役行者を祀ったとは考えにくい。むしろ、富士山の聖地である小室浅間神社の周囲に、修験者が祀る行者堂や時衆の本拠地である時宗寺院が営まれたとみたほうがよからう。

しかし、興味深いことに、円楽寺の行者堂の本尊である役行者像は夏季には富士山二合目の行者堂に移祀されたと伝えられ、実際像には移動の際に縄で固定されたような傷が残る。山岳登拝の期間には富士山二合目で祀り、シーズンが終ると再び円楽寺に帰座するということが、毎年繰り返されていた可能性が高いのである。この風習は山の神と田の神の交替を連想させるものであるが、祭祀場所のあり方に注目すれば、円楽寺の行者堂が恒常的な祭場であるのに対し、富士山二合目の行者堂は臨時の祭場としての性格をもっていたといえるのではないか。そのことは、円楽寺行者堂が寺院の中核施設として機能していたのに対して、富士山二合目の行者堂が修行に際して祀る拝所の礼拝施設として位置づけられていたことを意味しよう。とすれば、円楽寺行者堂は中世寺院の一部、富士山二合目の行者堂は仏堂として理解できるのではなかろうか。

2 寺院と神社

第二に、検討する必要があるのは、寺院と神社の識別である。

神社を『広辞苑』で引くと「皇室の祖先や神代の神または国家に功労のあった人を神として祀ったところ」とあり、一般の民俗神を祀るような施設は神社ではないように記されているが、『日本民俗大辞典』では「神道の信仰のもとづいて神々をまつるために建てられた建物、もしくはその施設の総称」とし、『日本民俗事典』には「特定の集団が神を祀るための場所で、そこにヤシロやホコラなどの建物が設けられていることが多い」とある。『日本民俗大辞典』が建物を重視するのに対して、『日本民俗事典』は建物の有無にかかわらず場所を重視する視点に立っており、神社に対する考え方の相違が指摘できるが、いずれも『広辞苑』のような祭神の国家的性格を基準とすることはない。

神社とはなにかを明確にすることは、寺院の概念を整理する以上に困難で、神社建築の特色を正確に把握することもまた難しい。そもそも神社建築自体が仏教寺院の影響のもとに形成されたという経緯があり、しかも古い現存遺構が少ない状況で、礎石などしか残らない遺跡からどこまで判断できるのかという疑問がある。その解決は建築史家に委ねるよりほかないが、中世には神仏習合が進み、宮寺や神宮寺が各地で営まれたなかで、中世寺院遺跡が神社遺跡と無関係にはありえなかったことも確かである。

実際、今回の調査対象でもある山梨市牧丘町柚口金桜神社奥社地遺跡は、金峰山の里宮である金桜神社の奥社鎮座地周辺に所在する遺跡で、発掘調査の結果、東側に神社関連の遺構群、西側に寺院関連の遺構群が分布することが確認されている²⁾。東側の遺構群は、下から5号テラスの2号建物跡・2-2号テラス・2-1号テラス・1号テラスの1号建物跡などからなり、それらが石段で繋がっている。1号建物跡は拝殿、2号建物跡は割拝殿とみられることから、これらの遺構群が一体となって神社としての機能を発揮していたと推測できる。西側の遺構群は、3号建物跡・4号建物跡・5号建物跡が方形広場を囲むようにコ字形に配されており、3号建物跡を本堂とする寺院が想定されている。3号建物跡は3面に庇をもつ3間四面の礎石建物、4号建物跡は3間四面の礎石建物、5号建物跡は桁行4間梁行3間の礎石建物で、3号建物跡と4号建物跡は仏堂と考えられるが、5号建物跡の性格は明確にできない。あるいは庫裏的な性格をもっていたのであろうか。これら西側の建物群は、9-

2号テラスを中心にまとまっており、神宮寺としての性格をもつ可能性が高い。東側の遺構群と西側の遺構群は、全体として計画的にレイアウトされており、神社と寺院が空間的に分離されながらも、より高次元での統合が図られていたと考えられる。

今回の調査によって小菅村長作の古観音で検出された建物遺構は、付近に磐座とみられる育ち石などが存在することを勘案すると、神社に関連する施設である可能性があろう。もしそう考えてよいとすれば、13世紀後半に建築された仏堂である長作観音堂と一体となって、中世寺院を構成していたと推測することができる。いまだ詳細は不明であるが、神祇信仰と観音信仰が習合した宗教形態を、中世寺院のあり方から読み取れる可能性がある。

ところで、こうした寺院と神社のあり方を考えるうえで重要な事例が、古代の山林寺院である香川県まんのう町中寺廃寺で知られている。中寺廃寺の伽藍を検討した上原真人は、寺院が3地区から構成されることに注目し、それぞれの地区の性格を、A地区が仏堂と塔からなる中枢施設、B地区が大川山信仰に関わる神社と修行僧の僧房、C地区が民間信仰にもとづく「石塔」行事の根拠地であると推測した³⁾。中寺廃寺は、機能的に分化した3つの地区から構成されており、それぞれの地区が担っていた仏教・神祇信仰・民間信仰を統合するかたちで1つの寺院が成立したと考えたのである。中寺廃寺は10世紀を中心に栄えた古代寺院であるが、中世寺院の伽藍構成のあり方を先取りしている面があり、中世寺院における寺院と神社の関係を考察するうえでも参考となる。

寺院と神社は性格を異にする宗教施設であるが、両者は排除しあう性質のものではなく、中世寺院においてはしばしば両者が共存しつつ1つの宗教施設として維持されていた。神仏習合のもとでは、寺院と神社の異質性が認識されながらも、それ以上に両者を統合したより大きな宗教のあり方が模索されたのである。中世寺院では、神社や小祠が寺院を構成する要素として取り込まれ、全体として神仏を網羅した曼荼羅的な宗教観念に支えられながら、寺院の空間構成が生み出されたと考えられる。

3 寺院と城館

第三に、考えてみなければならないのは、城館との関係である。

城館は、城郭と居館を合せたことばで、『広辞苑』によれば、城郭は「①城とくるわと。また、城のくるわ。②特定の地域を外敵の侵攻から守るために施した防御施設」、館は「貴人や豪族の宿所または邸宅。たち。との」で、前者が軍事施設であるのに対して後者は居住施設であることが知られる。『歴史考古学大辞典』では、城郭の説明のなかで「元来、城と館は原理的に異なり、恒常的な城の成立以前である古代末から鎌倉時代においては、平時の政治・生活空間は、館（屋形）・家・宅などと呼ばれ、それに対して非常時の防御をもつ施設を城郭と呼んだ」とし、本来的には城が軍事施設、館が政治・居住施設であったとしている。軍事・政治・居住のための施設と宗教施設の識別がつかないことはありえないと思われるが、城館の特徴とされる土塁や堀を伴う中世寺院や敷地内に仏堂を伴う城館が存在するために、遺跡の性格を判断することが難しい場合が出てくる。

今回調査を実施した南アルプス市鮎沢の古長禅寺は、正和5年（1316）に夢窓疎石によって開山された寺院であるが、境内周辺に顕著な堀と土塁がみられる。堀と土塁が構築された時期は不明であるが、14世紀に遡る可能性は低く、軍事的な緊張度が高まった15～16世紀の遺構である可能性が高い。境内からは発掘調査で桁行方向41.25m・梁行方向14.80mを測る長大な建物基壇が検出されており、講堂など寺院の建物であると考えられるが、構築時期が定かでない。この大型基壇の北側に接するように堀が東西方向に走るが、大型基壇との間隔が狭く、同時に存在した遺構とは考えにくい。基壇建物が14世紀の創建時に遡るものとすれば、それが何らかの事情で廃絶した後に堀が掘削され、土塁を伴う寺域の整備がおこなわれたことになろう。その場合、鎌倉時代に創建された寺院が、戦国期に防禦機能をもつように整備されたと考えてよかろう。

中央市布施小井川遺跡では、周囲に溝をもつ屋敷地内に、桁行9間・梁行6間の大型礎石建物、その東西に付属屋とされる小規模な礎石建物が配された状態が発掘されており、調査担当者は在地領主層の居館と考えた。大型礎石建物などは16世紀に築造されたものであるが、遺跡からは14世紀に遡る五輪塔や宝篋印塔などが検出されており、長期間にわたって供養の場として利用されていたことが確認された。大型礎石建物を主屋とみる

ことも可能であるが、居館の主屋としてはきわめて規模が大きく、寺院の本堂である可能性も否定できない。その場合、大型礎石建物が本堂、東側付属屋が庫裏に比定できよう。小井川遺跡のあり方は、寺院と城館の区別の困難さを示しており、考古資料に即した識別法の樹立の必要性を実感させる好例といえよう。

それらはいずれも寺院と居館の関連を示すものであるが、寺院と城郭が深い関係に置かれている事例として、大月市岩殿山を取り上げておこう⁴⁾。岩殿山は標高 637 m の低山であるが、山頂から山腹にかけて露出する鏡岩が存在することで、古くから近在の人々の信仰を集めてきた。東麓には大同元年（806）創建と伝えられる円通寺があり、応永 6 年（1399）から同 8 年にかけて奉納された大般若経によって 14 世紀末までには地域の信仰の拠点となっていたことが確認され、文明 19 年（1487）には聖護院の道興准后が訪れたことが「廻国雜記」にみえる。中世寺院としての円通寺の実態は不明な点が多いが、山麓の観音堂・三重塔・鐘楼を中心に、その前面の平坦地に大坊・常楽院などの院坊を配し、背後の岩殿山の山腹に七社権現・新宮を祀るものであった。岩殿山は円通寺境内の聖地として管理されていたとみられるが、16 世紀までには、山頂部に岩殿城が築城された。城郭はしばしば聖地に築かれることがあるが、敵が侵入しにくい神仏の領域に城郭を構えることで、防禦性を高めようとしたものとみられる。武田氏の「境目の城」として相模の後北条氏への睨みを効かせた城郭であった。武田氏が中世寺院を軍事的な目的で利用した例とみてよい。

このように、中世寺院と城館、とりわけ居館は、古代寺院と官衙の識別ほど困難ではない場合が多いが、一見類似した相貌を呈することがある。ある遺跡が、堀や土塁に囲まれ、大型建物を中心とした建物配置を採用することが確認できたとしても、それだけでは寺院か居館か判断できないのである。おそらくそうした外観の共通性は、寺院と居館がともに公的な性格をもち、地域の政治や軍事と深く関係していたことに由来するものと思われる。また、城郭は 15 ～ 16 世紀に中世寺院の一面にしばしば築かれるが、築城主体が戦国大名や国人なのか、それとも寺社が独自に設けたものなのか、十分な吟味が求められてこよう。

4 寺院と廟・墓地

第四に、考慮する必要があるのは、寺院と廟・墓地の関係である。

『広辞苑』によれば、廟とは「死者の霊を祭る所。霊屋。おたまや」のことで、死霊を祀る施設であるとされているから、かならずしも死体が埋葬されていなくてもよいらしい。宗派の開祖を祀る祖師堂や寺院の開山を祀る開山堂も一種の廟とみてよさそうである。廟が霊を祀る所であるのに対して、墓地は死体を埋葬する所で、『広辞苑』には「死者を葬って墓を建てる場所」とある。建てるというのは墓標を意識して言ったことばであろうが、墓標がなくても、死体が埋葬されていれば墓地と断定してよからう。もっとも、埋葬とはいえない風葬や鳥葬などのいわば遺棄葬の場合は、葬地ではあっても墓地ではないとする意見もあろう。『日本民俗大辞典』では、墓を「死者の遺体が納められている場所およびその装置のこと」と規定しており、遺棄葬であっても死体が葬られた場所であれば墓地と把握してよい。しかし、「納められている」という表現には葬送儀礼の結果としてその場所に安置されているという含意があり、殺害されて遺棄された場合などが含まれないことはいうまでもない。どのような葬法であるかは問われないが、社会的に認知された葬送であったことが、墓地の条件であると理解できる。

そこで問題になるのは、高野山奥の院などの納骨は、はたして葬送なのだろうかということである。『広辞苑』には「遺骸を荼毘に付した上、その遺骨を容器に納めること。また、遺骨を廟所や納骨堂に納めること」とあり、前半は火葬骨の取り扱い方法を指し、後半は納骨習俗を説明するが、問題なのは後半の部分である。納骨習俗では、全部の遺骨が納骨されるわけではなく、分骨された一部の遺骨のみが納められるのが一般的である。そこで、分骨の項をみると、「遺骨の一部を分けて、他に移すこと」とあり、単に遺骨を分割するだけでなく、他の場所に移動することが記されている。つまり、基本的に、遺骨の大部分が埋葬された場所とは別の場所に、遺骨の一部を移すことが分骨なのである。一般に納骨習俗といわれているものは、より厳密に言えば、分骨習俗というべきものである。分骨の結果として、寺院などに納骨されるわけで、両者は一連の流れとして捉えなければならない。『日本民俗大辞典』では、納骨を「火葬後に拾骨して、遺骨を墓あるいは霊場に納めること」としており、おそらく大部分の遺骨が納められた場所が墓、分骨された一部の遺骨が納骨された場所が霊場というふうに、納

骨場所を区別しているのであろう。とすれば、分骨された遺骨の一部を納骨した場所は、墓地ではないのである。そこは霊場もしくは納骨場所ということになる。

中世寺院と墓地の関係を考える際には、墓地と納骨場所を厳密に区分し、それぞれについて別個に検討する必要がある。墓地の場合は葬送儀礼に寺院が関与したこと、納骨場所の場合は寺院が死霊の行き先として信仰されたことを示す。両者を正確に峻別しないと寺院に対する評価を誤ることになる。

ところで、寺院と墓地は、本来直接の関係を持たなかった。むしろ、清浄な寺域に死穢が及ぶことは、寺院の機能を全うするうえで障害となるものであったから、寺院では葬式をおこなわないのが本来のあり方であった。古代には、開山や開基などその寺院と特別な関係にある人物を除いては寺域に墳墓を営むことはなかったが、鎌倉時代になると高僧の墳墓の周辺に弟子などが墓域を営むことがみられるようになる。室町時代には、そうした風潮が俗人の間にも広まり、墳墓を営む階層の拡大とともに、寺墓が形成されるようになる。また、こうして寺院と墳墓が密接なものと認識されるようになると、逆に墳墓の脇に供養のための施設として寺院を創建する場合が出現する。そうして創建された寺院を、寺墓と区別して、墓寺と呼んでいる。畿内に典型的にみられる大規模な墓域である惣墓では、葬祭に関わる葬式寺とあくまでも供養のみに携わる菩提寺が機能的に分化し、葬式寺と菩提寺がセットとなって墓地をめぐる祭祀が執り行われることになる。

今回調査した笛吹市境川町大黒坂の聖応寺は康暦元年（1379）に無住道雲禅師によって創建され、その後応永年間（1394～1427）に黒坂五郎信光によって現在地に移されたといわれ、本堂跡の背後に開山堂跡と開山墓が残る。ここでは、廟としての性格をもつ開山堂と死体を埋葬した墓が一体となり、寺院のもっとも奥まった位置に配されたことが知られる。また、大和村棲雲寺は貞和4年（1348）に業海本浄によって創建された禅寺であるが、境内に観応3年（1352）7月銘の開山塔と文和2年（1353）7月15日銘の普同塔の2基の宝篋印塔があり、普同塔の地下から業海の骨蔵器と推定される常滑大甕が出土した⁵⁾。禅宗寺院で開山墓を営む風習は、塔頭が形成されると同時に始まったもので、地方寺院では寺院そのものが塔頭としての性格をもった可能性がある。ちなみに、塔頭は『広辞苑』に「禅宗で大寺の高僧が死んだ後、その弟子が師徳を慕って塔の頭（ほとり）に構えた房舎」とあるように、師僧の墓塔の傍らに建てた寺院を指して呼ぶことばである。

北杜市小笠原深山田遺跡は、複数の段状に連続するテラスから掘立柱建物・火葬施設・墓坑などが検出され、仏具である銅鉢などが出土したことから寺院遺跡と考えられている。そこからは、五輪塔・宝篋印塔・板碑など多数の石塔が発見され、葬祭に深く関わった寺院のあり方を窺うことができる。また、今回調査した南部町浄光寺では、裏山から五輪塔や宝篋印塔など多量の石塔が出土し、現在境内入口に立て並べられている。ほかにも境内から多数の石塔が発見された中世寺院遺跡は多いが、その大部分は、開山など特定の人物を供養したものではなく、檀家や信徒の墓地を境内に設けたものとみられる。深山田遺跡のように火葬施設をもつ寺院は、葬式寺としての機能を果し、周辺の地域社会において重要な役割を担っていた可能性が高い。葬式寺がいつ成立したかは重要な課題であるが、深山田遺跡では火葬施設が15世紀に出現しており、その頃が大きな転換期であったことが考えられる。中世前期と後期では寺院の果たした役割に大きな違いがあった可能性が指摘できるのである。

おわりに

以上、中世寺院遺跡と仏堂・神社・城館・廟・墓地の関係について検討し、中世寺院遺跡の枠組みを明確にしようと試みた。その結果、さまざまな課題が次々と浮上してきたが、いずれも結論を出すことはできなかった。

また、納骨遺構や霊場などとの関係を論じ残したが、後日の課題としたい。

註

- (1) 笹生衛 2007「考古学から見た中世の寺院と堂—東国の事例と変遷を中心に—」『中世寺院 暴力と景観』高志書院
- (2) 山梨市教育委員会 2006『山口金桜神社奥社地遺跡—山梨市牧丘町山口地内の山岳寺社跡学術調査報告書—』
- (3) 上原真人 2008「讃岐中寺廃寺の空間構造」『忘れられた霊場をさぐる3—近江における山寺の分布—』栗東市教育委員会
- (4) 岩殿山総合学術調査会 1998『岩殿山の総合研究—県史跡岩殿城跡、旧円通寺跡及び岩殿山の自然—』大月市教育委員会
- (5) 小野正文 1984「棲雲寺出土の常滑大甕」『丘陵』10号